5

大阪宣教師会議から京都看病婦学校へ——「もう一つの近代医療・看護」の細い系譜をたどる

小野尚香
神戸親和女子大学

研究目的

一八八三年四月、大阪外国人居留地で宣教師会議が開かれた。その医療部会で、来日医療宣教師らによって、医療のあり方が論じられ、日本における医療活動が模索され、彼らからみた当時の日本の医学・医療情況が浮き彫りにされた。それから三年余り後の一八八六年九月、医療部会出席者の一人である医師ベリー（John Cutting Berry）らによって、京都の地で京都看病婦学校／（付属）同志社病院の活動が始動した。

大阪で論じられた内容を分析し、三年余りの紆余曲折を経て、京都で具現化された「もう一つの近代医療・看護」活動について検討することを研究の目的とする。

研究方法

一次資料を用いて、ベリーの活動理念や活動内容に関わる資料を中心に解読・整理した。使用した資料は、"Proceeding of the Osaka Conference-Medical Mission", "Life and Light for Woman", 京都看病婦学校の "Annual Reports", ベリーならびに一八八六年に始動した京都看病婦学校／（付属）同志社病院の看護指導者であるリチャーズ（Melinda Ann Judson Richards）の記録等である。

結果

大阪宣教師会議では、日本の近代医療はすでに制度として構成され、欧米諸国から来日し近代医療をもって文明化をすすめるという医療宣教師の役割が、各地の主幹病院において終えたことが確認された。また病人を癒すことにおいては、キリスト教精神における医師としての重荷とスピリチュアルな側面の重要性につ

いて話し合われた。

京都看病婦学校／（付属）同志社病院は、彼らの思いが具現化した一つのかたちであり、近代アメリカ医学・看護を基に看護師を養成し、キリスト教精神を掲げた医療・看護活動は全人的ケアを指向した。また、看護活動として、家庭への訪問看護や地域看護活動を行い、看護とともに病人の介護・育児の方法や環境衛生などの指導を行った。看護倫理には、キリスト教精神とともにヒポクラテスの精神が織りなされた。

まとめ

大阪宣教師会議での論議、京都看病婦学校／（付属）同志社病院での活動は、明治日本における近代西洋医学に基づく医療のあり方に多様な可能性があったことを示唆している。ベリーらの医療活動は、日本政府による「制度的医療」とは近代性においては類似していても、医療の意味や機能において異なるものであった。

日本の「制度的医療」は近代化政策のひとつの方策であり、ベリーの医療はキリスト教精神を具現化したものであったといえる。この近代的なキリスト教看護活動は、派出看護活動への契機となり、京都の仏教活動にも影響を与えていった。